「知恵と霊に満ちて」　　２０２６年３月１日　主日礼拝
使徒言行録　第６章８～１５節

３月に入りました。２月のスチュワードシップ月間も終わり、私たちはまた、使徒言行録に戻ってきました。１月の最後の週で私たちは、使徒言行録６章１～７節の箇所から、執事が選ばれた話を学びました。ディアスポラと呼ばれていたギリシア語を話すユダヤ人たちが、食事のことで不平等に扱われているとヘブライ語を話すユダヤ人たちに訴えがありました。言葉が通じないことによる不公平感は、どの世界にもあります。とりわけ、大震災や大規模火災などの大きな自然災害が起こると、その地に住んでいる外国の人たちは言葉が通じなかったり、正しい情報を得ることができないで支援を受けられないことがしばしば見受けられます。この人たちは被災地において、もっとも弱く小さくされた人たちなのです。同じように、ユダヤ人キリスト者の社会でも、言葉の問題で不公平を感じる人たちが現れてきました。当時、初代教会を治めていた十二使徒たちは、教会の中に起こってくるあらゆる問題を取り扱っていましたが、ギリシア語を話すユダヤ人たちの食事の世話までとても手が回りませんでしたので、彼らのお世話係として執事が選ばれました。この執事の働きは、私たちがこれまで一ヵ月間学んできたスチュワードシップ・管理者としての働きでした。たとえばアパートを管理する管理人さんは、そこに住む人たちが安心して快適に暮らすことができるようにお世話をします。これが管理者としての働き、スチュワードシップなのです。私たち人類は、神様が造られた世界に住むすべての被造物が安心して快適に暮らすことができるように、神様の世界を管理する働きを託されました。同じように、初代教会において最初に選ばれた執事たちは、教会に集う人々が安心して快適に信仰生活を送ることができるように、管理を任されているのでした。そして、執事として選ばれたのは、使徒言行録６章３節に記されていますように「“霊”と知恵に満ちた評判の良い」人たちでした。その中でも特に、ステファノという人はたくさんのすぐれた働きを行いました。この３月の間、私たちはこのステファノの行いと彼が語った説教、そして彼が殉教していく様をご一緒に学んでいきたいと思います。

さて今日の聖書の箇所に入りますと、ステファノは恵みと力に満ち、すばらしい不思議な業としるしを民衆の間で行っていたことが記されています。ここで大切なことは、民衆の間で行っていたということです。教会の業は教会の中だけで行われるのではなく、教会員同士だけでお互いに行うものでもありません。教会の業は、教会の外に出ていき、人々の間で行われるのです。礼拝を通して力をいただいた私たちは、教会の外に出かけて行き、さまざまな教会の業、人々に仕える働きを行うのです。イエス様は言われました。「あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。また、ともし火をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである」。　このように、礼拝で力をいただいた私たちは、世の光として人々の元へと遣わされていくのです。

こうして民衆の間で力ある業を行っていたステファノでしたが、９節にそのステファノと議論を交わす人たちが出てきました。初代教会が置かれていたエルサレムは、ユダヤ教の中心地でした。ユダヤ教は、そこから派生してきたキリスト教を認めませんでした。彼らにとっての一番の問題は、イエスがキリスト・救い主であるかどうかということでした。ユダヤ教の人たちにとって、イエスはキリスト・救い主ではありませんでした。なぜなら、

ユダヤ教の人たちにとって神とは、旧約聖書に記されているように全知全能であり、したがって苦しんだり痛んだりすることは決してない神でした。まして神が死ぬことなどありえませんでした。ですから、十字架上で痛み、苦しみ、死んでいったイエスはキリスト・救い主ではないと理解するのです。けれども私たちキリスト教では、痛むはずのないお方、苦しむことも死ぬこともないお方が、神と等しいことを善しとはせずにこの世に降って来られ、私たちと同じ人間の肉体を取られ、私たちと同じ痛みや苦しみを味わわれ、私たちと同じように死んでいかれた。だからイエスはキリスト・救い主なのだと告白するのです。

キリスト教がもっとも大切にしている点とかみ合わないユダヤ教の人たちのところで福音を宣べ伝えていたステファノは、多くの人たちと議論になりました。ところが１０節にありますように、ステファノが知恵と霊とによって語ったので、議論した人たちはまったく歯が立ちませんでした。そこで彼らは人々を唆して、嘘の証言をさせます。昔も今も、権力を持っている者たちは、自分の手を汚さずに人々を唆して嘘の証言をさせるのです。

イエス様のときもそうでした。マルコによる福音書１４章の後半に、ゲッセマネの園でイエス様が裏切られて逮捕される場面が出てきます。逮捕されたイエス様が最高法院で裁判を受けていると、１４章５５節以下にはこんな記事が記されています。「祭司長たちと最高法院の全員は、死刑にするためイエスにとって不利な証言を求めたが、得られなかった。多くの者がイエスに不利な偽証をしたが、その証言は食い違っていたからである」。　今日の聖書の箇所で、ステファノと議論して勝てなかった人々は、１１節にありますように、【彼らは人々を唆して、「わたしたちは、あの男がモーセと神を冒涜する言葉を吐くのを聞いた」】と言わせました。そしてステファノを捕らえて最高法院に引いていき、偽の証人を立てて、こう言わせました。「この男は、この聖なる場所と律法をけなして、一向にやめようとしません。わたしたちは、彼がこう言っているのを聞いています。『あのナザレの人イエスは、この場所を破壊し、モーセが我々に伝えた慣習を変えるだろう』」。　こうしてステファノは偽の証言を受け絶体絶命のピンチを迎えますが、訴え出られたステファノの顔は、さながら天使の顔のように見えたと記されています。なぜでしょうか。この後、ステファノは、最高法院で旧約聖書から説教を行います。ステファノが語った説教は、モーセと神を冒涜する言葉ではなく、モーセの慣習を変えるものでもありませんでした。むしろステファノは、旧約聖書で約束されていたことを成就するためにイエス・キリストは来られたことを語るのです。律法の成就に関しては、イエス様御自身がマルコによる福音書５章１７節からの箇所で、このように語っておられます。「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである。はっきり言っておく。すべてのことが実現し、天地が消えうせるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない。だから、これらの最も小さな掟を一つでも破り、そうするようにと人に教える者は、天の国で最も小さい者と呼ばれる。しかし、それを守り、そうするように教える者は、天の国で大いなる者と呼ばれる。言っておくが、あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない」。　このように、イエス様御自身も律法を完成するために来られたと語っておられますから、今日の聖書の箇所でステファノに対して偽証した人たちの証言は、まったく嘘偽りであることがわかります。ステファノが語った説教については、来週以降、ご一緒に学んでいきますが、今日は、そのように偽の証言をされたステファノの顔が、さながら天使の顔のように見えた、という点に注目してご一緒に考えてみたいと思います。

ステファノが引き出された最高法院は、これまで見てきましたように、ステファノに対する嘘の証言をする人たちばかりで、ステファノの味方は誰一人としていませんでした。それなのに、なぜステファノの顔は天使の顔のように見えたのでしょうか。

ここでは、二つのことが考えられます。一つ目は、ステファノが最高法院という場所で、彼に対してよからぬ思いを抱いている人たちの前で、福音を語る機会を与えられたことに大きな喜びで満たされていたということです。今日の招詞でも取り上げましたように、イエス様はマルコによる福音書１３章１１節で、こう語っておられます。１３章５節から読みますと、こんなことが記されています。【イエスは話し始められた。「人に惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがそれだ』と言って、多くの人を惑わすだろう。戦争の騒ぎや戦争のうわさを聞いても、慌ててはいけない。そういうことは起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない。民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に地震があり、飢饉が起こる。これらは産みの苦しみの始まりである。あなたがたは自分のことに気をつけていなさい。あなたがたは地方法院に引き渡され、会堂で打ちたたかれる。また、わたしのために総督や王の前に立たされて、証しをすることになる。しかし、まず、福音が民に宣べ伝えられねばならない。引き渡され、連れて行かれるとき、何を言おうかと取り越し苦労をしてはならない。そのときには、教えられることを話せばよい。実は、話すのはあなたがたではなく、聖霊なのだ。兄弟は兄弟を、父は子を死に追いやり、子は親に反抗して殺すだろう。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる」。】　最高法院に引き出されたステファノは、イスラエルでもっとも権威ある場所で福音を宣べ伝える機会が与えられたのです。そのようなすばらしい機会が与えられたステファノの顔は、天使のように輝いていたのです。

そして二つ目は、これも先ほどのイエス様の言葉と関係していますが、ステファノのように最高法院に引き出されてイエス様のために証言する人たちは、証言する内容を自分で準備しなくても、聖霊によって語る言葉が整えられるというのです。ですからステファノは決して恐れませんでした。けれども、ステファノがまったく何の準備もしなかったのかというと、そうではないと私は思います。ではステファノはどのような準備をしていたのでしょうか。それは、御言葉と祈りによる準備でした。御言葉を毎日読み、自分の中にたくさんの御言葉を蓄えること。蓄えられた御言葉は、聖霊の導きによって必要な御言葉が自由に引き出されてくるのです。そして、祈ることによって整えられていくこと。人々の前でたくさんの働きをなされたイエス様も、ときおり、群衆や弟子たちから離れて、一人で山に登って祈っておられました。また、マルコによる福音書９章で、悪霊にとりつかれた子どもから霊を追い出すことができなかった弟子たちに対して、イエス様はこう言われました。「この種のものは、祈りによらなければ決して追い出すことはできないのだ」。

ステファノは知恵と“霊”によって語る人でした。そしてその準備は、御言葉を蓄えることと祈ることだったのです。私たちも、どのような場面でも聖霊に導かれて対処することができるように、御言葉と祈りによって整えられていきたいと願います。

お祈りしましょう。